〈特別寄稿〉

フランス滞在記

山口誓子

1999年10月から2001年9月までの2年間，大学院を休学させていただき，筆者の研究対象の場である，フランスに滞在してきた。先生方，研究室の皆様の寛大なご配慮のもと，2年という比較的長い休学期間をいただいたにもかかわらず，筆者の力量不足で，その滞在の多くの時間を語学研修にあてることとなってしまい，この場をもって研究報告に至らなかった点をまずお詫び致したい。研究報告ではなく滞在記にすぎない本稿を，研究室紀要へ投稿することには躊躇いを覚えるが，ここでは，フランス滞在において感じたことを，特に教育・教育学に関することを中心にして，述べていきたいと思う。

まず，滞在地についてであるが，1年目はノルマンディ地方の都市カン，2年目はパリを選んだ。カンは県庁所在地ではあったが，街の規模としては，日本でいえば地方の中堅都市といったところで，いろんな意味で「何でもある」パリとは，別世界といえるほどであった。このことは，教育について考える際にも，地域の規模など考慮に入れなければならないことが多くあると実感させられることとなった。

次に，語学研修で印象深かったことをいくつか記しておきたい。語学を学ぶといえば，もちろん発音・文法がすべての基礎であるが，ある程度の規則を学んだ後は，パターンを繰り返しで覚えていくのみでなく，発音にしても文法にしても，数学の証明問題を解く感覚で，なぜそうなるのかと問われることが多かった。これはフランス語が，ラテン語の系統を持つ屈折語たる所以であろうか。膠着語である日本語との根本的な違いを感じることとなった。その他，フランス語教育においては，よく言われるように，フランスの歴史・文化に関するものが重視されていることも実感できたが，特に人文諸科学の伝統の深さに改めて気づかされることになった。単に文学という分野だけに限らず，新聞雑誌・ラジオなどのメディアから研究書に至るまで，筆者がそれまで見落としていた，あるいは字面だけを追っていたもののなかに，古典からの引用やレトリックが多く鏤められている，ということである。これらを解釈できるまでには，相当の鍛錬が必要で，筆者の力の及ばないものであるから，深く入り込むことはできないが，テクストや言説を読んでいく際に，どこかでわかり得ない何かがあることに自覚的であることは大事なことであろうと思われた。

フランスの教育学は，日本におけるそれと同様に，非常に学際的であり，各分野に境界線を設けるのは難しいことであるが，それでも大きく分けて，社会科学に関する分野，心理学・社会心理学に関する分野，知の構築・伝達に関する分野（construction et transmission du savoir）に分類されている。

社会科学に関する分野においては，主に教育制度全般の機能・発展についての研究が行われており，歴史学・政治学・行財政学・社会学・人類学・哲学などが含まれる。歴史学において感じたのは，現代史の始まりは時系列上，戦後からではあるが，フランス革命期から第三共和制に至るさまざまな政

治的・社会的紛争のなかで生まれてきた思想が今も深く息づいており，それらへの考慮なしには現代史は語れないということであった。また，表舞台で大きく扱われた「歴史」に対して，それまで捨象されていた個別具体的な「歴史」をどう取り扱うかが論議されている。このことは，社会学においても共通する面をもち，伝統的な量的研究に対して，質的研究の興隆，特に個々の事例を比較的長い期間にわたって検討する研究などがあり，その正当性が問題となっている。これは，社会学が社会構造を暴いていくなかで，結局は悲観論に行きつくしかないといった状況から脱却するために，アティピックな事象に着目することによって突破口を開いていこうという方向性である。とはいえ，事象をでき得る限り鮮明に浮かび上がらせ，本質に迫っていこうという試みのなかで産み出されてきた違いであるから，論争としては，明らかな二項対立ではなく，それぞれの特性を生かして，より適切な研究方法を探しているといえる。政治学，行財政学においては，地方分権をめぐる諸問題に関しての思想的・実証的・実践的検討が進められていると同時に，多民族国家の抱える，普遍と特殊性の関係に対しての多角的なアプローチが見受けられる。

心理学・社会心理学に関する分野では，さまざまな教育の場面のなかで，各主体の，各パートナーの，あるいは各集団の行動を分析するための，心理学的アプローチが行われている。臨床的アプローチ，ピアジェ理論など多岐にわたっているが，子どものみならず成人の継続教育も中心的な分析対象であることが注目される。知の構築・伝達に関する分野は，教育方法学，教育工学，言語・数学教育などが含まれており，知の構築に関する原理やプロセスの分析が行われている。

以上，フランス教育学について若干のまとめをさせていただいたが，後半の2分野については，ごく簡単な紹介になってしまうなど，筆者の偏った興味関心と，狭量な視野による教育学の概観である点をどうかお許しいただきたく思う。

今回の滞在では，資料面においても，現地調査を行えなかったことなど，自分の研究対象そのものに直接切り込むまでには至らなかった。また，フランスにおける問題性の認識方法についても，筆者の理解は，いまだ不明瞭な点が多い。今後の課題は山積しているが，フランスでなされている研究において，いかに事象を認識するのかというアポリアが，現在においても繰り返し繰り返し問いかけられており，そのことが，当の事象分析と同等，いやそれ以上の重要度で語られている点から学びうることが多い，ということは強く感じられた。特に，日本人である筆者がフランスを研究対象として検討していく際には，より一層の枠組みに対する検討が必要となるが，それは研究を進めていくなかで，自分の思考様式に常に問いかけを行い，試行錯誤を繰り返していくほかに培われないものである。これらをふまえたうえで，筆者のこれからの研究において忘れてはならない態度として，社会学者であり人類学者でもあった，モースの言葉を取り上げ，本稿を閉じたいと思う。

> …調査における主観的であることからくる障害。表面的な観察に終わる危険性。「信じ」てはならない。見たのだから知っているのだと信じないこと。道徳的判断を一切してはならない。逆上してはならない。土地の社会の生活をその内部で生きるよう努めること。
>
> (Mauss, *Manuel d'ethnographie*, 1947，渡辺公三氏部分訳より引用)